
挟んだ想い

大豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

挟んだ想い

【Nコード】

N0450U

【作者名】

大豆

【あらすじ】

平和な学校。

平和な生活。

平和な、恋。

いつまでも想い続ける物語は、無限。

ブローグ

俺は想い続ける。それが奇跡になると信じて。
今はもう遠く、手の届かないところに居るアイツに再会するため
に、俺は想い続ける。

私は想い続ける。それが奇跡になると信じて。
今はもう遠く、手の届かないところに行ってしまったあの人に、
また逢うために、私は想い続ける。

想いの力は無限。そう教えてくれた人が居た。
その人はもう居ないけど、その存在は私達を何度も救った。

私達をジャマした人が居た。私達はこの人を恨んでは居ない。
恨むべき相手は居ない。いや、正確には……

主人公になる人間

僕は、想い続ける。奇跡を求めて。
想い続けると奇跡が起こる。そう、僕は信じている。
いつまでも。

そう、いつまでも……

「春秋。そろそろ起きろ」

朝、兄さんの声で目が覚める。

僕は、春秋。高校一年生。兄さんは高校三年。兄さんの名は篤哉。
頼れる兄さんだと、俺は思う。

「わかったよ……」

まだ眠っている頭を無理やり動かし、体を動かす。頭が痛い。

僕は頭痛持ちだ。生まれつき。物心ついたときから。

「今日の朝ごはんは？」

僕は兄と二人で暮らしている。家事は兄担当。昔からずっとそう
だったから疑問もなにも抱かなかった。僕も、なんかしたほうがい
いとは思っただけだなにすればいいのかわからない。

「今日は俺も寝坊した。朝飯はない」

「え……」

「まあ、大丈夫だろう。お隣さんに食べさせてもらおう」

この失礼極まりないセリフも、うちでは簡単に出てしまう。お隣
さんは、幼馴染みで、なおかつ一人暮らしだ。ほんと、漫画やゲー
ムみたいである。

「じゃ、いくぞ」

「うん……」

僕達は隣の、幼馴染み。椿の家に行く。年は兄さんと同じ。兄
さんと同じクラスだったはずだ。

「篤哉……すぐあたしを頼るの、そろそろやめたらどうかしら……」

「すまん。お前しか、居ないんだ」

兄さんは素でこういうことを言う。このせいで学校では意外とモテる。僕から見ても、かつこいいとは思うけど。

「あんたね……ま、いいわ。すぐ食べなさい。遅刻するわよ」

兄さんの態度にも慣れている様子で、椿は適当に済ませる。

食べ終わり、学校へ。

「じゃ、春秋。がんばってこいよ」

「うん」

僕はうなずき、教室へと走った。

「今日は、転校生を紹介します」

僕のクラスに転校生？ またいきなりだな。

転校生、と思われる見たことのない少女は教室の扉を開け、入ってくる。少女の顔は繊細。ライトノベルや漫画で何度も見た単語、美少女という言葉が似合う容姿だった。

しかし、彼女の目に光はとっていない。彼女の目は薄暗く、全てをあきらめたような、寂しい目をしていた。

「はじめまして。私は山代高校から来ました、天星 茜と申します。何卒、よろしくおねがいします」

彼女は淡々と言つてのける。教室は一瞬の静寂から、拍手に包まれた。

彼女は、それこそ淡々と。周りをきよろきよろ見たりもせず指定された自分の席まで歩いてくる。席は僕の隣。漫画で何度も見たような状況だ。でも僕は、主人公にはなれない。

いつも、そうだった。僕はいつも、兄さんに守られて。僕なんかより相当主人公にふさわしい、兄さんの背中に隠れていた。僕は弱かったんだ。そんな僕に、与えられた主人公になるチャンス。僕はこれを……弾いた。

僕は転校してきた彼女と全くかわらないようにしていた。主人公にふさわしいのは僕ではない誰かだ。僕のクラスには主人公つ

ばい人が何人が居る。そうだ、彼らがなればいいんだ。

僕には関係ない。そうだ、何も関係ないんだ。

放課後。僕は部活には入っていない。兄さんは部活でも人気で、僕とは大違いだ。だから僕はいつもひとりで帰る。寂しいと思ったことはない。いつものことだから。

この学校は、ほとんどの生徒が部活に入っている。僕が入らない理由は簡単。やりたいこと、得意なことがないんだ。

校門にたどり着くと、すぐそこに転校生の……天星さんが居た。は、話しかけてくることはないだろうけど、少し気まずいからなあ。少し早歩きで追い越してしまおうか。

「ねえ」

ああ、まさか話しかけられるとは思っていなかった……無視は逆にフラグを立ててしまいそうだから一応返事はする。

「何？」

「あなたは主人公には向いていない」

なんだよいきなり。そんなこと僕だってわかってるさ。でも君に言われる筋合いはないと思う。

「でも、だからこそあなたは主人公になれる。完璧な主人公はおもしろくない。欠点がある主人公の方が、世界はおもしろくなるのよ」

……はあ？ 僕が主人公になれるだって？ さっき向いていないって行っただじゃないか。

「そんな、ことはないよ。僕は主人公にはなれない。主人公にはならない」

「どうして？」

感情のない瞳で見つめてくる。どうしてか、少し不安になった。彼女はその目で何を見ているんだろう。彼女はその目で何が見えてるんだろう。僕と彼女は同じものを見ているのだろうか。もしかすると彼女は、この世界が曇って見えているのかもしれない。もしかすると、とても輝いて見えているのかもしれない。真実を知る術

は僕にはない。それでも僕は、それだけが気になって、聞いてしまっただ。

「君は、どうしてそんなあきらめたような目をしているの？」

「……私は幸せになれないから。私はこの世界に嫌われているから」
「君は……」

電波なの？ そう機構としたけれどやめた。ただの電波でここまですは曇らないだろう。

「私は……なに？」

「え？」

そうか、途中で遮ったから聞いてきたのか……どうしよう。

「君は……」

「私は？」

「その……すごいね」

何が？　すごいって何！？

「私がすごい？　何で？」

「えと、その、そんな世界に嫌われながらこうして強く生きているじゃないか。僕はそんなの耐えられないね。君は、主人公にふさわしいと思う」

これでごまかせたかな。

「……ありがとう。あなたはやっぱり主人公。あなたがそう思わなくても私はそう思いつづけるわ」

そういつて彼女は、初めて笑顔を見せた。

想う力は無限

ある朝突然担任教師が言った。

「夢を持てるのは子供だけだ。大人は現実を知っている。今のうちに、夢みとけよ」

なんともベタな言葉だった。なのに僕の心にはその言葉がよく響いた。

休み時間、茜が僕の席によってくる。いいよ、もう関わらないのはやめた。

「あなたに夢はあるの？」

「うーん……教師になりたいかな」

僕の小さい頃からの夢は教師だった。でもまあ、僕の成績じゃあムリだろうけど。

「あなたは夢を持っている。なのにあなたはあきらめている。そんなの、もったいないわ」

ごもつとも。

「僕の成績だと教師はきついからねえ」

「ならもつと努力すればいいのよ」

いきなりだが、僕は努力をしたことがない。する必要がないんだ。なにかあっても兄さんが助けてくれるし、いざというときは椿も助けてくれる。俺はそんな二人に甘えて、いつまでたっても努力せず、強くなれないでいたんだ。

「僕の未来は二トかなあ……」

「なんか悲しくなるわね」

本当にね。

さてもう放課後。今日は一日が早く感じた。今日はどこの部活も、職員会議で休みらしいので僕は、茜、兄さん、椿と一緒に帰る。

「春くん、もう彼女が居るの？ 隅におけないわねえ」

椿がからかってきた。

「いやいや。っていうより椿も兄さんとラブラブじゃないか」

「いや。俺はこいつとラブった覚えはない」

「ひどーい」

こんな、バカップルみたいなやり取りがかわされる中、一人静かに歩いているのがいる。

「茜」

僕は茜に声をかける。兄さんと椿で会話してる邪魔をするのも悪いし、茜をほっとけなかったので、なんか適当に話でめしようかと考えたのだ。

「なに？」

「いや、茜は、今楽しくないのかな、って思ってた」

「……大丈夫。まだなれてないだけだから」

茜はかすかに微笑んで言った。本当にそうだったらいんだけど

……

「私、世界に嫌われてるって話はしたよね？」

「え、ああ」

「それでもね、自分では人に嫌われてるわけじゃないと思ってるの」

「うん。僕も嫌ってないよ」

「ありがとう。ともかく、だから私、友達ができないわけじゃないの。ちょっと暗い子みたいな感じなの。だからきつと、もうすぐしたらふ、二人とも話せるようになると思うわ」

茜は、兄さんと椿と話したいと思ってるのか。手助け、できることはないかな。

「私は、そう信じてるわ」

茜がいった。その話を聞いていたのか兄さんがこちらを向き、言った。

「想う力は無限。強い想いがあればなんだってできるさ。お前の想いは伝わった。これからは、俺らにも普通に話してくれると、うれしい」

「そうそう。私達はそんなのぜんぜん気にしないから。ただ仲良くしたい、って想ってくれてる人とは仲良くなりたいたい、って想うよ」
二人が茜に言う。さすがだ。僕ではどうしようもなかったことを彼らは平然とやってのける。やっぱり自立できないんじゃないかな

……

「……ありがとうございます」

心なしか、茜の目に微かだが生気が蘇った気がした。

僕と兄さんは家につく。

「そうだ春秋。明日家を空けてもいいか？」

兄さんが尋ねる。

「いいよ。どっかいくの？」

「ああ、椿と買い物にな」

「へえ。デート？」

「そんな甘いもんじゃないさ」

いや、たぶんデートだよそれは。

「まあ、一日くらいはなんとでもなるさ。ゆっくり楽しんできてね」

「ああ」

兄さんも、ずっと僕の世話ばかりしていたらだめだとおもつ。ちゃんと息抜きもしてほしい。そうだ、明日一日がんばって、兄さんに僕が一人でも大丈夫だって見せ付けて家事を分担できるようにしよう。そうすれば兄さんの負担も減るだろうし。

「そういえば、どこ行くの？」

「ちよつと、電車を使う」

「へえ、遠いね」

「ああ。明日、なにか無理があったらすぐ電話していいからな。すぐ駆けつける」

「安心して。僕は大丈夫だから！」

僕は、胸を張り言ってみせた。僕は、これから強くなるんだ。そう、なにがあっても。

なにがあっても強くなる。
そう誓ったんだ。

あの事件が起こるまでは。

翌日。僕が朝起きたらもう兄さんは居なかった。居間に一枚置手紙。

『朝飯は冷蔵庫に。なにかあったら連絡しろよ』

朝ごはん、作らせちゃったのか。悪いことしたな……

僕は朝ごはんを食べて、適当にテレビをみたり本を読んだりぐだぐだしていた。

あ、忘れてた。強くなるんだった。じゃあ、まず洗濯かな。

洗濯カゴのなかには洗濯物は一枚もなく、すべてきちんと干されていた。兄さん、あんた完璧だよ。

あいにく夕飯は作られていなかったのでもやることは見つかった。あれ？ 兄さん達帰ってくるのおそいな。そんだけのしんでるってことかな。

ふとテレビを見る。緊急速報だった。

僕はしばらくの間、そのニュースをなんともおもっていないかった。ニュースの内容は、電車の脱線事故。乗客のほとんどが亡くなっていたらしい。

僕には関係ない。そう、気づくすぐ前までおもっていたのだ。

事故にあった電車は、兄さんと椿が乗っている電車。たしかこの電車で帰ってくるはずだった。その電車が事故にあっているということ……まさか……

僕はいそいで兄さんの携帯に電話する。

『おかけになった電話番号は——』

なんと電話しても淡々とした声が聞こえるだけ。

なんども、なんども電話しても、兄さんは電話にでない。

僕はなんども願った。なんども想った。二人は無事だと。無事で
あってくれと。想う力が無限なら、きっとこの思いは無駄にならない
はずだ。そう信じて想い続けた。

それから数時間後、家に兄さんの死を告げる電話がきた。

兄さん

「兄さん。今日の朝は僕が作ったんだよ。食べて」

僕は自分と兄さんの分の朝食をテーブルに並べる。今日は珍しく僕が作った。それでも自信はある。

「どうしたの？ 兄さん。嫌だったらいいんだけどさ……一口くらいは食べて欲しいな……」

兄さんの朝食は全く減らない。兄さんは箸や食器に手を触れさえしない。僕は順調に食べ進める。

「兄さん、もう結構時間が経っちゃったから食器、さげていい？」

返事はない。でも僕は食器を片付ける。おなががすいたらまたなにか作るだろう。

家のチャイムがなった。だれだろう。

「兄さん。僕が出てくるね」

兄さんに一言言ってから玄関へ歩いていった。

「はい、どちらさまでしょう」

「……こんにちは」

いたのは茜。

「ああ、茜か。どうしたの？」

茜は前よりいつそう暗い目をして僕に聞いた。

「その……お兄さん達がどうなったか、理解してる？」

「どういう意味だ。少し考えてみる。うーむ、わからん。」

「どういうことだ？」

「今お兄さん達がどうなってるかわかってる？」

兄さん？ 兄さんは普通に家で過ごしてるさ。

「家に居るよ？ さっき朝食を済ませたところ」

そう答えると、茜は表情を曇らせた。茜が表情を変えるなんて珍しい。

「どうしたの？」

僕がそう聞くと……

「目を覚ましてよ！ 現実を見て！ あなたのお兄さん達は……っ！」

いきなり怒鳴られた。ますます訳わからない。

「茜こそどうしたんだよ。なんか電波でも受信してるの？」

「……またくるわ……っ」

そういつて茜は去っていった。この前は距離がちぎったと想ってたんだけどな…… やっぱり難しい。

「兄さん、茜だったよ。覚えてる？ この前一緒に帰った子」

「うーん、やっぱりまだ覚えてないかぁ……」

「そういえば今日は椿こないね」

「いつもならすぐ来るのに」

「なにかあったのかな」

兄さんは何も話さない。

「そうだ、今度僕と兄さんと椿と茜の四人でどこかに出かけない？」

「兄さん、椿とたまに出かけるでしょ？」

「椿に聞いたらいいとこ見つかるかもしれないし、こんど聞いてみよう」

兄さんは何も話さない。

「兄さん、僕が言ってること聞こえてる？」

返事はない。

「兄さん？」

返事はない。

今、少しおかしいことに気づいた。いくら無口な兄さんでも、ここまで話さないのはおかしい。それに、話しかけたらちゃんと返してくれる人だし……

「……っ」

「かれこれ一週間くらいかしら」

「一週間も……」

一週間、俺は兄さんの死を受け入れていなかった。当然だ。僕の名によりも大事な人だったんだから。

「僕は、どうすればいいんだ……」

「あなたは……生きればいい。お兄さんと、椿さんの分まで長生きすればいい！　それが、あなたにできる最大の使命！」

僕は茜に止められ、この場は生きること誓った。

でもこの先も、生き続ける自信は、なかった。

変化。

兄さん達の死を乗り越え、数日が経った。まだ僕一人では脆く、茜がいないとダメだけでも。

「お前ら、やりたいこと、やらなくてはならないことは今のうちにやっとけよ。何が起こるかわからないからな」

ある日、唐突に担任が言った。おそらくこの間の列車事故を踏まえてのことだろう。

「お前らが本当にやらなくてはならないことをするためだつたら授業なんてさぼってもいい。だからお前ら、絶対後悔すんなよ」

やりたいこと、やるべきこと。そんなもの僕には無い。今の僕には生きていくことだけで精一杯だ。

「んじゃ、授業を始めるぞ」

それまた唐突に授業が始まった。

その日もまた、特に何も無く授業は進み、終わり。あつというまに放課後だ。

「茜ー。帰るか？」

「あ、今日ちよつと本屋によりたいんだけどいい？」

「うん。いいよ」

本屋ねえ。最近はコンビニしかいってないからなあ。久しぶりだ。そもそも僕はあまり本を読むほうではない。小説やら漫画やらは正直いってあまり読まない。好きなゲームの漫画版とかは読むけれども。テレビもそんなに見ないからなあ。地方はアニメも少ないし見ることが無い。

本屋の中はあたりまえだが前きたときと大差は無かった。

本の並びが変わっているくらい。そういえばこの本屋、ゲームも売ってたよな。

あ、このゲームリメイク版出たんだ。主人公以外フルボイスねえ。別にソコまで気にしたこと無いからなあ。追加シナリオがあるなら買うんだけど……

「終わりましたよ」

「お。じゃあ帰ろうか」

僕達は本屋からでる。

本屋から出る頃にはもう日の沈む頃。もうすぐ暗くなるなあ。

「茜。僕はさ。もう周りの誰かが不幸になるのは嫌なんだ。だからさ、何かあったら是非相談してもらいたい。力になれなくてもさ。話し相手くらいにはなれるから」

「それはお互い様です。春君も、どんどん私を頼ってくださいね」

「ん、わかった」

「じゃ、ここで」

「ん。また明日」

次の日、茜は学校に来なかった。

その次の日も、そのまた次の日も。

それから茜が学校に来ることは無かった。

変化。(後書き)

もうすぐ終わり

永遠。

どれだけ待っても茜は学校に来なかった。

放課後。

「先生」

僕が今呼んだ先生は担任ではなく、生徒指導の佐々木だ。

「ん、夏冬か。どうした」

「茜についてなんですが」

「……今はあいつが来るのを待ってる。お前にはそれしかできない」
佐々木は冷たく言い放つ。

「でも、僕は知りたいんです。なんで学校に来ないのかを」

「なら天星の家にもいつて直接聞け。俺を巻き込むな」

「茜の家に言っても、なにも言ってくれなかったんです。なにも話してくれなかったんです。だから、いまは先生だけが頼りなんです！」

僕は佐々木にすがる。

「離してくれなかったって言うのはつまり、お前には知ってもらいたくないってことなんだよ！ だから今はおとなしくしておけ！」

「嫌だ！僕は……僕は……」

「まあまあ。佐々木先生。そいつもそうまでして頼んでるんですから。少しくらい教えてやったらどうですか」

口を挟んだのは担任。石坂。

「石坂先生。そうはいつでもですね……あなたも事情は知ってるでしょう！」

「ふーむ。そうだな。おい、夏冬。お前、教えてもらいたいのか？」

僕は頷く。

「よし、俺が教えてやる。だが、その先にどんな事実があっても落

ち込むんじゃないぞ」

僕は、もう一度頷いた。

「天星はな、その、最後に学校に来た日の帰り、ちよいとまあ、不審者におそわれてな」

「……」

「まあ、その、言いづらいんだが、襲われてな。完全に心を閉ざしてるんだ」

「……なんで茜がッ」

「天星も、そんなことお前には知ってもらいたくなかったんだろうな。だが、お前は知りたと言った。お前なら、あいつを直してやれるんじゃないかと思ってお前に教えた。お前がするべき言葉なんだ」

「茜を、助けるんだ」

「いつてこい。これからの授業は俺が顔を利かせてやるっ」

「ありがとう、先生！」

僕は走り出す。

茜の家の前。僕はなんていおうか迷っていた。気にすんな、なんて言葉じゃ軽い。なんていえばいいんだろう。

チャイムを鳴らす。返事は無い。

チャイムを鳴らす。返事は無い。

……やっぱりか。

僕はふと、茜の家のポストに目を向けた。手紙がいくつか入っている、しばらく取っていないんだろう。……ん？　なんか一つ、ちがうところにおかれた封筒がある。これは……

その封筒には春君へ、と書かれていた。

『春君へ。私はもう汚れてしまいました。もう春君に合わせる顔がありません。この手紙を見たとき、おそらくもう私はこの世にいな

いでしょう。封筒の中に鍵を入れておきます。最後のわがままです。私の死体は腐る前に処理してもらいたいな、なんて。さよなら。私の、最後の友達。 茜より』

僕は急いで茜の家の中に入る。茶の間のドアを開けた瞬間。すべての絶望が僕の中に入ってきた。

目の前にいるのは、いやあるのは首をつった茜。僕は急いで救急車を呼ぶ。

そして、病院に運ばれるまでも無く、茜の死亡が確認された。

永遠。(後書き)

次は百合が書きたいな。
あと一つ、二つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0450u/>

挟んだ想い

2011年8月22日03時44分発行